

子どもの運動に対する小学校教師の意識

都 築 繁 幸 (愛知教育大学教育学部*)

山 下 玲 香 (愛知教育大学非常勤講師)

要約 小学校4年生から6年生の学級担任, 191名を対象に子どもの運動に対する小学校教師の意識を検討した。30項目からなる「教師の運動の意識」尺度が構成され, 性別, 教職経験年数, 経験した学校種, 現在の担任の学年によって意見が異なるかどうか分析された。その結果, 以下のことが示された。

- 1) 「教師の運動の意識」尺度において「伝承遊びの効用」, 「運動指導の視点」, 「教師の運動への関心」, 「子どもの運動と体力」の4因子が抽出された。
- 2) 男性教師は, 運動を肯定的に捉え, 運動指導に自信を持ち, 体育授業によって子どもの体力は向上するとし, 女性教師は伝承遊びが文化的な遊びであると考えていた。
- 3) 経験年数の少ない教師は, 運動を好み, 子どもと一緒に遊ぶことを重視する傾向にあった。中堅の教師の方が, 経験年数の少ない教師よりも運動指導に対する自信が見られた。
- 4) 中学校を経験している教師の方が小学校のみしか経験していない教師よりも運動指導に自信がある傾向がみられた。
- 5) 4年生の担任の方が, 5・6年生よりも伝承遊びの影響を重視していた。

キーワード: 小学校教師, 運動観, 伝承遊び

I. はじめに

小学校の教育現場から体力の向上をめざした取り組みが報告されるようになった。しかし, それらの取組の中には教師の経験不足によって指導の工夫が十分にされているとは言えない実践もあることが指摘されている(文部科学省, 2013; 文部科学省, 2012)。すでに中央教育審議会(2002)が, 1) 発達段階に応じた指導ができる指導者が少ない, 2) 学校教員の経験不足や専任教員が少ないために楽しく運動できるような指導の工夫が十分でない, と指摘しているにも関わらず, 依然として指導者に関わる問題が横たわっている現状がみられる。これらの指摘を改善していくには教師の運動への取り組みの意識を明らかにし, 子どもの体力向上に関心のある教師を養成していく方策を検討していく必要があると思われる。

従来の研究において小学校教師の体育授業や授業単元の視点から検討したものとして吉野(2002), 安藤ら(2003), 寺山(2007)のものがある。これらの報告には, いずれも何を教えたらいいかかわからない, と感じている教師は, その不安から授業を展開する自信が欠落し, 最終的に指導しない, という負の連鎖に陥る, とする教師の姿が示されている。岡野ら(2010)は, 約8割の教師が, 子どもの体力は低下している, 子どもの体力低下は重大な問題である, と認識しているにもかかわらず, 体育授業として体力を高める運動の実施状況は約4割, 体育授業以外で取り組んでいるのは約3割であった, と報告している。熊谷ら(2013)

は, 体育好きの教師は, 体育の授業では子どもが嫌がる言葉を使って勝敗をつけ, 競争する内容を多く授業で取り入れる傾向にあり, 一方, 体育嫌いな教師は子どもの自主性をあまり取り入れてはいるが, 体育や運動に対する否定的なイメージから脱して運動の楽しさや面白さを子どもたちに伝えていると述べている。岩間(2011)は, 小・中学校の体育主任に子どもの体力低下に関する意識調査を行ったところ, 子どもの体力向上に及ぼす学校の役割は大きく, 他の教員の協力が得られるような体育経営を展開することが子どもの体力向上につながると強調している。

これらの報告から教師の運動への考え方・捉え方(以下, 「教師の運動意識」とする)が, 教師の教授行動に反映しているものと推察される。また, 教師の体育単元の意識のあり様によって子どもが感じる運動の楽しさや面白さが抑制されてしまい, 子どもの運動嫌いを助長し, 体力に関する無関心さを増大させてしまっていると推測される。教師が子どもの運動への期待や欲求を理解し, それに基づいて指導していくことが子どもの体育好きを増やし, 体力向上に繋がっていくのではないかと考えるならば, 教師の運動への意識は重要な要因となると考える。

そこで本研究では子どもの運動に対する小学校教師の意識を検討することとした。

研究を行うに先立って以下の点を考慮した。

1) 前述した熊谷ら(2013)は, 小学校教師の体育好き・体育嫌い, 岩間(2011)は, 体育主任の子どもの体力向上に関する調査を行っているが, 教師の運動への意識を一次的に調査することを目的にはしていない。そこで本研究では, 小学校4, 5, 6年生の担任

* 現 愛知教育大学教育学研究科非常勤講師

教師を対象として運動への意識に特化した調査を行うこととした。

2) 幼稚園の運動指導の実態や運動指導に対する意識を調査したものがあつた。柳田(2008)と吉田ら(2012)は幼稚園教師の運動遊びを、穂丸ら(2007)は伝承遊びと保育者の認識を調査している。柳田(2008)は、幼児期の運動遊びの充実が小学校体育への連続性を高めると考え、幼稚園教師の運動遊びに対する指導理念を調査した。幼稚園教師は幼児の自発的な運動欲求を重視し、必ずしも運動の発育・発達段階を考慮した指導を行ってゐなかつたことから運動遊びに対する指導理念が子どもの体力低下を抑制している一因となつてゐると考察している。穂丸ら(2007)は、伝承遊びを保育活動に導入する理由として、1)子どもの成長や発達に有効である、2)日本の遊び文化の継承のためである、ことを挙げているが、保育者の伝承遊びに対する知識不足を警告している。こうした研究から幼児期の運動遊びが小学校体育への連続性を高め、伝承遊びが子どもの成長や発達に有効である、といった視点にたち、伝承遊びに関する項目を質問紙に取り入れた。

3) 中央教育審議会(2002)や文部科学省(2012, 2013)の指摘から教師の運動への取り組みの意識が重要であることが示唆される。今回は、その要因として教師の性別、経験校種、担任学年、経験年数を取り上げた。

4) 吉野(2002)、安藤ら(2003)、寺山(2007)は、体育授業や授業単元の視点から検討しているが、今回は、教科としての体育で行われる活動のみならず、休み時間、放課後等に行われる活動も含めた、子どもが体を動かすという、広義の「運動」という視点から検討することとした。そのことによつて体力の向上策を考える基礎資料を提供しようとした。

II 方法

1. 調査対象者

A県内の4年生から6年生担任の小学校教師191名を対象に調査を行った。今回の分析は、回答に不備がなかつた187名とした。

男女の内訳は、男性が91名、女性が96名であつた。

教員研修として初任研修、5年研修、10年研修が設けられていることから、ここでは経験年数を1年～5年を経験少群、6年～10年を経験中間群、11年以上を中堅群と分類した。その結果、経験少群が80名、経験中間群が37名、中堅群が70名となつた。

経験した校種として小学校のみが129名、小・中学校の両方が58名であつた。

現在、担任している学年は、4年生担任が67名、5年生担任が66名、6年生担任が54名であつた。

2. 手続き

調査は無記名式の質問紙調査法とした。実施時期は201X年7月から8月である。質問紙を各学校に配布し、後日、回収した。

調査用紙は、フェースシートと質問項目からなる。教師の要因に関する項目として性別、経験校種、担任学年、経験年数を取り上げた。

質問項目は、熊谷ら(2013)、岩間(2011)、柳田(2008)、吉田ら(2012)の研究を参考に作成し、30項目からなる「教師の運動への意識」尺度を構成した。この尺度の質問項目は表1に示されている。

各項目に対して「かなりあてはまる(5点)」、「ややあてはまる(4点)」、「どちらでもない(3点)」、「あまりあてはまらない(2点)」、「まったくあてはまらない(1点)」の5段階で回答を求めた。

3. 分析の観点

以下の観点から分析を行う。

- 1) 「教師の運動への意識」尺度を分析し、全体的傾向を把握する。
- 2) 教師の意識構造を検討するために「教師の運動への意識」尺度の因子分析を行い、因子構造を明らかにする。
- 3) 運動への意識に関する各項目に対して性別、経験年数、経験した校種、担任している学年等とどのような関係が見られるかを検討する。

III 結果

1. 教師の子どもの運動に対する意識の特徴

(1) 全体的な傾向

各項目の得点を高得点順に並べ、全体的な傾向を分析した。その結果を表1に示す。

上位にある項目から、教師は、1) 体力低下が身体運動の低下に影響を及ぼす、2) 放課後の運動が子どもの体力の影響を及ぼす、3) 子どもの運動を考えたときにはケガの防止を重視している、4) 子どもたちの体力向上の取り組みのためには、子ども同士と一緒に活動したり、業間での運動が体力の向上に繋がる、ことに賛意を示している傾向が見られる。

それに対して下位の項目から、教師が、1) 子どもと一緒に遊ぶことを重視しない、2) 子どもたち自身が体力への向上に取り組んでいるとは見なしてはゐない、3) 子どもの運動指導に自身があるとは感じてゐない、4) 伝承遊びを4年から6年次の運動に取り入れるとは考えてゐない、等の傾向が示された。

こうしたことから教師は、子どもの体力を気に留めながらも運動の安全面に注意が向き、子どもたちが体力向上に積極的に取り組んでいるとは認識しておらず、教師自身は運動そのものは好きであるが、運動の指導に自信をもつてゐない、とする姿が浮き彫りにさ

れたと言える。また、伝承遊びがコミュニケーション形成に影響を及ぼし、運動の中に伝承遊びを含めて考えていながらも、それを必ずしも4年生から6年生までの時期に実施していくことが適切であるとは考えていないことも示された。

(2) 因子分析による検討

「教師の運動への意識」尺度に関する項目について、主因子解・バリマックス回転による因子分析を行い、回転後の因子負荷量の絶対値0.50以上を基準として、因子負荷の高い項目により因子を解釈した。表2にその結果を示す。

第1因子には、「鬼ごっこ等が心の健康に影響を及

ぼす」、「野外で遊ぶことを重視」、「鬼ごっこ等がコミュニケーションの形成に影響を及ぼす」、「鬼ごっこ等が子どもの成長や発達に影響を及ぼす」などが含まれた。これらは、伝承遊びが子どもの社会性や心身の成長に影響を及ぼすとする項目群であることから第1因子を「伝承遊びの効用」と命名した。

第2因子には、「運動の技術指導を重視」、「基礎的な運動能力の向上を重視」、「けがの防止を重視」、「子どもたちが、自分の体力の向上に積極的に取り組んでいる」などが含まれた。教師が運動の指導の際に重視している項目群であったことから第2因子を「運動指導の視点」と命名した。

表1 全体的傾向

順位	No	項目	平均値	標準偏差
1	18	私は、子どもの体力低下が、身体運動の低下に影響を及ぼすと思います	4.17	0.863
2	27	私は、放課後の運動が、子どもの体力の向上に影響を及ぼすと思います	4.13	0.779
3	20	私は、子どもの運動について考えるときには、けがの防止を重視します	4.12	0.837
4	10	私は、子どもの頃、鬼ごっこ・ボール遊び・ゴム跳び・花いちもんめ等をよくしていました	4.08	1.081
5	29	私は、鬼ごっこ・ボール遊び・ゴム跳び・花いちもんめ等が、コミュニケーションの形成に影響を及ぼすと思います	4.08	0.820
6	9	私は、子どもたちの体力向上の取り組みにおいて、子どもたち同士で一緒に行った方が良いと思います	4.05	0.854
7	14	私は、業間での運動が、子どもの体力の向上に影響を及ぼすと思います	3.99	0.962
8	30	私は、今の子どもの体力が、ほぼ10年前に比べて低下していると思います	3.95	0.963
9	22	私は、体育の授業が、子どもの体力の向上に影響を及ぼすと思います	3.94	0.869
10	1	私は、運動そのものが好きです	3.89	1.258
11	8	私は、自分が小学校と中学校時代、体育の授業が好きでした	3.89	1.335
12	24	私は、子どもの運動について考えるときには、基礎的な運動能力の向上を重視します	3.86	0.784
13	26	私は、子どもの体力の向上のために、運動指導の専門の担当者が必要だと思います	3.80	0.957
14	28	私は、子どもの運動について考えるときには、自発的な運動欲求を重視します	3.77	0.717
15	5	私は、子どもの体力低下が、心の健康に影響を及ぼすと思います	3.75	0.875
16	6	私は、子どもの運動について考えるときには、野外で遊ぶことを重視します	3.73	0.993
17	3	私は、子どもの運動について考えるときには、運動技能やルールの指導を重視します	3.69	0.867
18	12	私は、鬼ごっこ・ボール遊び・ゴム跳び・花いちもんめ等を運動の中に含めて考えています	3.65	0.944
19	2	私は、子どもの運動について考えるときには、子ども同士で遊ぶことを重視します	3.64	0.929
20	21	私は、子どもの体力の向上のために、運動の技術指導を重視します	3.57	0.829
21	25	私は、鬼ごっこ・ボール遊び・ゴム跳び・花いちもんめ等が、子どもの成長や発達に影響を及ぼすと思います	3.49	0.857
22	7	私は、鬼ごっこ・ボール遊び・ゴム跳び・花いちもんめ等が、心の健康に影響を及ぼすと思います	3.47	0.988
23	11	私は、子どもたちの体力向上の取り組みにおいて、先生と一緒にいった方が良いと思います	3.45	0.949
24	17	私は、子どもたちが、自分の体力の向上に関心を持っていると思います	3.32	1.023
25	15	私は鬼ごっこ・ボール遊び・ゴム跳び・花いちもんめ等が、日本固有の文化の継承に影響を及ぼすと思います	3.29	0.968
26	19	私は、子どもの運動について考えるときには、先生が子どもと一緒に遊ぶことを重視します	3.29	1.013
27	23	私は、子どもたちが、自分の体力の向上に積極的に取り組んでいると思います	3.17	0.857
28	4	私は、現在、授業以外で定期的に運動をしています	2.67	1.498
29	16	私は、子どもの運動指導に対して自信があります	2.65	1.142
30	13	私は、鬼ごっこ・ボール遊び・ゴム跳び・花いちもんめ等を運動に入れる時期は4年生から6年生がふさわしいと思います	2.20	0.949

第3因子には、「運動そのものが好き」、「自分が小学校と中学校時代、体育の授業が好き」、「現在、授業以外で定期的に運動をしている」が含まれていた。教師の運動の好き嫌いや運動習慣に関する項目群であったことから第3因子を「教師の運動への関心」と命名した。

第4因子には、「放課後の運動が、子どもの体力の向上に影響を及ぼす」、「子どもの体力低下が、身体運動の低下に影響を及ぼす」が含まれていた。放課後の運動と体力との関連や子どもの体力低下の項目群であったことから第4因子を「子どもの運動と体力」と命名した。

表2 因子分析の結果

No	項目	因子負荷				共通性
		I	II	III	IV	
[第I因子 伝承遊びの効用 $\alpha=.725$]						
7	私は、鬼ごっこ ボール遊び ゴム跳び 花いちもんめ等が、心の健康に影響を及ぼすと思います	0.738	-0.191	-0.157	-0.070	0.428
6	私は、子どもの運動について考えるときには、野外で遊ぶことを重視します	0.607	-0.086	0.094	0.008	0.365
29	私は、鬼ごっこ ボール遊び ゴム跳び 花いちもんめ等が、コミュニケーションの形成に影響を及ぼすと思います	0.576	-0.037	-0.237	0.257	0.473
15	私は鬼ごっこ ボール遊び ゴム跳び 花いちもんめ等が、日本固有の文化の継承に影響を及ぼすと思います	0.559	0.224	-0.206	-0.180	0.358
25	私は、鬼ごっこ ボール遊び ゴム跳び 花いちもんめ等が、子どもの成長や発達に影響を及ぼすと思います	0.550	0.096	-0.117	0.015	0.338
[第II因子 運動指導の視点 $\alpha=.680$]						
21	私は、子どもの体力の向上のために、運動の技術指導を重視します	-0.118	0.763	-0.068	-0.011	0.483
24	私は、子どもの運動について考えるときには、基礎的な運動能力の向上を重視します	-0.086	0.602	-0.061	0.285	0.470
20	私は、子どもの運動について考えるときには、けがの防止を重視します	-0.082	0.585	-0.010	0.118	0.355
23	私は、子どもたちが、自分の体力の向上に積極的に取り組んでいると思います	-0.061	0.541	0.007	-0.069	0.254
[第III因子 教師の運動への関心 $\alpha=.725$]						
1	私は、運動そのものが好きです	-0.014	0.054	0.868	0.049	0.800
8	私は、自分が小学校と中学校時代、体育の授業が好きでした	-0.022	-0.013	0.660	0.119	0.456
4	私は、現在、授業以外で定期的に運動をしています	-0.053	-0.166	0.626	-0.020	0.334
[第IV因子 子どもの運動と体力 $\alpha=.543$]						
27	私は、放課後の運動が、子どもの体力の向上に影響を及ぼすと思います	0.032	0.182	0.003	0.553	0.426
18	私は、子どもの体力低下が、身体運動の低下に影響を及ぼすと思います	0.212	0.071	0.003	0.515	0.440
因子寄与		5.375	2.176	1.427	1.103	
累積寄与率		17.918	25.171	29.926	33.602	
						全体の信頼性 $\alpha=.717$

2. 教師の要因と子どもの運動への意識との関連

(1) 性差

表3は、男女間で得点に有意差が見られた項目を示している。

男性教師群が女性教師群よりも得点が高かったのは、「運動そのものが好き」、「現在、授業以外で定期的に運動をしている」、「自分が小学校と中学校時代、体育の授業が好き」、「子どもの運動指導に自信がある」、「体育の授業が、子どもの体力の向上に影響を及ぼす」であった。

それに対し、女性教師群が男性教師群よりも得点が高かったのは、「鬼ごっこ等を運動の中に含めて考え

ている」、「鬼ごっこ等が、日本固有の文化の継承に影響を及ぼす」、「鬼ごっこ等が、子どもの成長や発達に影響を及ぼす」であった。これらは第1因子である「伝承遊びの効用」に含まれた項目であった。

このように男性教員群は、運動指導に自信があり、自らも運動好きであり、体育授業が体力向上に影響を及ぼす、と考えている傾向にある。女性教員群は、伝承遊びを運動に含めて考え、それが文化の継承に影響を及ぼし、さらに伝承遊びが成長や発達に影響を及ぼす、とみなしている傾向にある。伝承遊びの考え方には明らかに性差があることが推測される。

表3 性別による分析

No	項目	男性	女性	t 値	p
		N=91	N=96		
1	私は、運動そのものが好きです	4.29 (1.078)	3.53 (1.306)	4.336	***
4	私は、現在、授業以外で定期的に運動をしています	3.12 (1.497)	2.26 (1.383)	4.132	***
8	私は、自分が小学校と中学校時代、体育の授業が好きでした	4.18 (1.131)	3.63 (1.454)	2.875	**
16	私は、子どもの運動指導に対して自信があります	2.96 (1.084)	2.35 (1.124)	3.724	***
22	私は、体育の授業が、子どもの体力の向上に影響を及ぼすと思います	4.12 (0.867)	3.77 (0.840)	2.805	**
12	私は、鬼ごっこ ボール遊び ゴム跳び 花いちもんめ等を運動の中に含めて考えています	3.50 (0.947)	3.80 (0.921)	-2.259	*
15	私は鬼ごっこ ボール遊び ゴム跳び 花いちもんめ等が、日本固有の文化の継承に影響を及ぼすと思います	3.08 (0.946)	3.49 (0.951)	-2.974	**
25	私は、鬼ごっこ ボール遊び ゴム跳び 花いちもんめ等が、子どもの成長や発達に影響を及ぼすと思います	3.36 (0.863)	3.62 (0.838)	-2.025	**

*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

表4 経験年数による分析

No	項目	経験少群	経験中間群	中堅群	F値	P値	多重比較
		N=80	N=37	N=70			
1	私は、運動そのものが好きです	4.28 (1.010)	3.54 (1.520)	3.63 (1.261)	7.449	***	少>中間=中堅
8	私は、自分が小学校と中学校時代、体育の授業が好きでした	4.38 (0.989)	3.43 (1.659)	3.57 (1.330)	10.722	***	少>中間=中堅
4	私は、現在、授業以外で定期的に運動をしています	2.99 (1.511)	2.97 (1.462)	2.15 (1.370)	7.358	***	少=中間>中間
18	私は、子どもの体力低下が、身体運動の低下に影響を及ぼすと思います	4.34 (0.693)	4.19 (0.996)	3.97 (0.932)	3.458	*	少>中堅
19	私は、子どもの運動について考えるときには、先生が子どもと一緒に遊ぶことを重視します	3.51 (1.006)	3.22 (0.976)	3.09 (1.004)	3.545	*	少>中堅

*p<0.05 ***p<0.001

(2) 経験年数

表4は, 教師の経験年数によって有意差が見られた項目を示している。

5年以下の経験少群が, 経験中間群と中堅群よりも得点が高い項目は, 「運動そのものが好き」, 「現在, 授業以外で定期的に運動をしている」, 「自分が小学校と中学校時代, 体育の授業が好き」であり, これらの項目は, 第3因子の「教師の運動への関心」に含まれていたものである。このことから比較的, 年齢が若く, 経験も浅い教員の方が運動への関心が高いことが示された。

経験少群が6年から10年の中堅群よりも得点が高い項目は, 「子どもの体力低下が身体運動の低下に影響を及ぼす」, 「子どもの運動について考えるときには, 先生が子どもと一緒に遊ぶことを重視する」であった。比較的年齢が若く, 経験の少ない教員は, 体力低下が身体運動の低下に影響を及ぼすと考え, 教師は子どもと一緒に遊ぶことを重視していることが示された。

このように経験年数の要因は, 教師の運動への関心に関連があることが推測される。

(3) 経験校種

表5は, 教師の経験校種別によって有意差が見られた項目を示している。

小学校しか経験していない群が小・中学校群よりも高い項目は, 「子どもたちの体力向上の取り組みにおいて先生と一緒にいった方が良い」とする項目である。小学校しか経験していない教師は, 子どもの体力

向上の取り組みに教師が関与することが重要であるとし, 小・中学校の両方を経験している教師は, 子どもの自主性を重視していることが推測される。小・中学校群が小学校のみ群よりも高い項目は, 「子どもの運動指導に対して自信がある」であり, 中学校の指導を経験することが運動指導への自信に繋がっているものと推察される。中学校では, 運動系の部活動の指導に関わることが多いことから, その経験がこの結果に反映されていると思われる。

(4) 担任学年の要因

表6は, 教師の担任学年別で有意差が見られた項目を示している。

5年生・6年生担任群が4年生担任群よりも得点が高かった項目は「現在, 授業以外で定期的に運動をしている」であった。4年生担任群が5年生・6年生担任群よりも高かった項目は「鬼ごっこ等が心の健康に影響を及ぼす」であった。4年生担任群が6年生担任群よりも得点が高かったのは「鬼ごっこ等が, コミュニケーションの形成に影響を及ぼす」であった。

このように5年生・6年生の高学年の担任よりも中学年の4年生の担任の方が, 伝承遊びが心の健康やコミュニケーションの形成に影響を及ぼすと考えている傾向にある。

IV. 考察

1. 「教師の運動への意識」尺度の全体的傾向

今回の調査項目は, 熊谷ら (2013), 岩間 (2011), 柳田 (2008), 吉田ら (2012) の研究を参考にし, 「教

表5 経験校種による分析

No	項目	小学校のみ	小 中学校	t 値	p
		N=129	N=58		
11	私は、子どもたちの体力向上の取り組みにおいて、先生と一緒にいった方が良いと思います	3.54 (0.928)	3.24 (0.970)	2.039	***
16	私は、子どもの運動指導に対して自信がありません	2.52 (1.090)	2.93 (1.212)	-2.306	***

***p<0.001

表6 担任学年による分析

No	項目	4年生担任	5年生担任	6年生担任	F 値	p	多重比較
		N=67	N=66	N=54			
4	私は、現在、授業以外で定期的に運動をしています	2.24 (1.334)	2.90 (1.519)	2.94 (1.571)	4.688	**	4<5=6
7	私は、鬼ごっこ ボール遊び ゴム跳び 花いちもんめ等が、心の健康に影響を及ぼすと思います	3.81 (0.856)	3.27 (0.994)	3.26 (1.031)	7.323	***	4>5=6
29	私は、鬼ごっこ ボール遊び ゴム跳び 花いちもんめ等が、コミュニケーションの形成に影響を及ぼすと思います	4.33 (0.705)	4.05 (0.831)	3.80 (0.855)	6.760	**	4>6

p<0.01 *p<0.001

師の運動への意識」尺度として探索的に作成した。

従来の研究において子どもの運動に対する教師の意識を検討することを目的としたものは見あたらなかった。表1の得点の上位の項目群から、教師は伝承遊びがコミュニケーション形成に影響を及ぼし、子どもの社会性や発育発達に影響を与え、伝承遊びがすべての子どもの集団で楽しく遊べるものと認識していることが明らかとなった。

その一方、伝承遊びを運動として4年生から6年までに取り入れていくことがふさわしいとは考えておらず、5年生・6年生の担任が4年生の担任ほどに伝承遊びの効用に賛意を示していないことも明らかとなった。

これらのことから、教師は、体育授業以外の業間や放課後の時間を有効に活用して体力を向上させるために競技種目ではない伝承遊びを導入することを考え、その導入にあたっては、各学年に応じた伝承遊びの内容を考え、学年に応じて指導したい、と考えていると推測される。

このことは、教師が、子どもの運動指導に自信がない、と考えていることと裏腹の関係にあることを推測させる。中央教育審議会（2002）が、発達段階に応じた指導ができる指導者が少なく、教師の経験不足のために楽しく運動ができるような指導の工夫が十分になされていない、ことを指摘しているが、教師が「体育の授業における運動」と「業間における運動」とを混在させて考えていることが推測される。業間での運動が体力向上に影響を及ぼし、伝承遊びを運動の中に含めて考えながらも、子どもの運動指導に自信がないとするのは、伝承遊びを「体育授業における種目としての運動」とみなして考えている場合と「運動の一部としての伝承遊びとして子ども同士のコミュニケーション形成に影響を及ぼすものとして限局された運動」と考えている場合があり、子どもの運動指導に自信がないと考えているのは、「体育授業における運動」の指導に自信がないのではないかと推察される。

2. 「教師の運動への意識」尺度の因子構造について

「教師の運動への意識」尺度の30項目について因子分解を行ったところ、4因子解が妥当であることが示され、「伝承遊びの効用」、「運動指導の視点」、「教師の運動への関心」、「子どもの運動と体力」の因子が抽出された。

第1因子の「伝承遊びの効用」因子は、運動としての伝承遊びが子どものコミュニケーションや発育発達に影響を及ぼしていることを示しているものである。石川ら（2013）は、伝承遊びが子どもの社会性や発育発達に与え、伝承遊びが日本社会においてごく自然に伝えられ、すべての子どもが集団で楽しく遊べるものであることを述べている。穂丸（2010）は、Sケンや

缶けり、石けりなどは、子どもの身体発達を促すために必要な運動量や質を備えており、子どもの社会性を育てる優れた遊びとしている。加古（2008）は鬼ごっこ遊び系、かくれんぼ遊び系、ボール遊び系などが身体発達を促し、伝承遊びを通して子どもの社会性や身体発育に効果があるとしている。

今回の全体的傾向の分析において伝承遊びがコミュニケーション形成に影響を及ぼし、それが学年によって影響の程度が異なっているものと考えられた。小学校教師が、伝承遊びの効用を感じていることから伝承遊びを用いた運動プログラムを考案していくことが体力向上の取り組みを発展させていくことにつながっていくものと思われる。

第2因子の「運動指導への視点」因子は、教師自身が運動指導で重視していることに関連するものであり、第3因子の「教師の運動への関心」因子は、教師自身の運動の好き嫌いや運動習慣の有無を表す因子である。この二つの因子が抽出されたことにより教師の運動への経験要因が、運動意識に影響を与えていることが推測される。子どもの体力向上への意識を教師自身が持つことが、運動が苦手な子どもにとって体育授業が貴重な運動場面となり、体育授業が楽しく感じられるようになるものと推察される。

第4因子の「子どもの運動と体力」因子は、放課後の運動が体力向上に影響を及ぼし、体力低下が身体運動の低下につながると教師が考えていることを反映したものである。教師は、体力低下と身体活動には関連性があり、体育授業以外に運動する時間を設けて業間や放課後の時間を有効に活用し、毎日、運動時間を確保したいと考えているのではないかと推測される。

3. 「教師の運動への意識」尺度に及ぼす要因

(1) 性差

佐藤ら（2000）は、男性は身体を動かしたいという欲求を持ったとき、ほぼ抵抗なくスポーツ行動に進み、スポーツを行う行為によって葛藤は引き起こされず、自らのアイデンティティーを強化するが、女性の身体を動かしたいという欲求は、ジェンダー規範に相反し、スポーツ行動に抵抗を示し、スポーツを行うことが葛藤を引き起こす行為になるとしている。このような葛藤が、女性が運動を好まない要因の一つになっているのではないかと推察される。今回、第3因子の「教師の運動への関心」に性差がみられた。女性は男性よりも運動指導に自信がない傾向が示され、性差が運動指導に影響することが推測された。男性教師は、体育授業が子どもの体力に直結し、重要であるとみなし、女性教師は男性教師よりも伝承遊びを運動に含めて考え、伝承遊びが子どもの成長や発達に影響を与えていると考えているものと推測される。このことから女性教師は、伝承遊びのようなルールに柔軟性があ

り、誰もが手軽に行える遊びを運動の一つと捉え、子どもの身体発育に役立つと認識しているものと推察される。

山下ら (2014b) は、小学生の保護者を対象に調査を行ったところ、男性は世代を超えて缶蹴り、女性では鬼ごっこやゴム跳びの実施率が高かったことを報告している。また、40代、60代、70代の女性で歌遊びの実施率が高く、女性が育児の経験があり、男性よりも子どもに接する時間が長く、子どもと文化的な遊びを行っていることから女性にとって伝承遊びは文化的な遊びであるのではないかと述べている。今回も女性教師は、伝承遊びが日本文化の継承に影響を及ぼすものと考えていることが示され、保護者を対象とした山下ら (2014b) と同様な傾向が示された。

(2) 経験年数

厚生労働省の「国民健康・栄養調査」(2012) は、運動習慣のある者 (1回30分以上の運動を週2回実施し、1年以上継続している者) は、男性では20代、50代が30代、40代よりも割合が高く、女性では20代、30代で低く、40代、50代で徐々に上がっていることを示している。今回の調査の中堅者の年齢は、おおよそ30～40代であろう。体力の衰えや体形維持、健康志向を持つ年代でありながらも中堅者は、初任者よりも仕事の要領を得ており、時間的な余裕ができ、運動をする時間が確保できるものと推察される。今回、「運動そのものが好き」に関しては、年齢が上がるにつれて運動が好きでなくなる傾向が示された。このことは、中堅群は経験少群よりも「子どもの体力低下が身体運動の低下に影響を及ぼす」、「子どもの運動について考えるときには、先生が子どもと一緒に遊ぶことを重視する」とは考えていないことに関連しているものと思われる。中堅者群は、学校経営上、委員会等の校内分掌で中心的な役割を与えられ、経験少群よりも責任ある立場に置かれている状況を考えると、経験年数が教師の運動・子どもの体力向上の意識に直接的な影響を与えるというよりも中堅群の校内における役割の要因も付加して考えていく必要があると思われる。

(3) 経験校種

今回、小学校しか指導の経験がない教師は、小・中学校経験の教師よりも子どもの体力の向上への取り組みに教師が参加していくことが望ましいとしていることが示された。中学校に勤務する教師は、運動系の部活動の顧問を経験することが多い。そこでは、子どもの自主性を尊重し、自発的な運動欲求による活動を求める傾向にあり、教師が過度に介入しない状況の中で一定の成果を上げているのではないかと考えられる。こうした中学校の経験が小学校で運動を指導する際の自信に繋がっているのではないかと推測される。

(4) 現在の担任の学年

山下ら (2014a) は、身体活動を伴う伝承遊びは、

子どもの自発的な運動を促す方法として有効であり、鬼ごっこ等は、走る、投げる、跳ぶなど、身体活動を伴う運動に位置付けている。今回、4年生の担任の方が鬼ごっこ等の伝承遊びが心の健康やコミュニケーションの形成に影響を与え、特にコミュニケーション形成については、4年担任教師は6年担任教師よりも非常に強く賛意を示していた。4年担任は、学年の発達段階からコミュニケーション形成と身体活動を関連させ、身体活動を伴う伝承遊びを体力向上の取り組みに有効なものとして捉えていることが推察される。このことは発達発育段階の要因を考慮して運動指導を捉えていくことの重要性を示唆していると言える。

4. 子どもの運動嫌いと体力低下

子どもの体力低下が指摘される中、本研究は、教師の運動意識に着目し、指導者側の要因から検討しようとした。

体力低下は、学童期に限らず、幼児期においても問題となっている (小林, 1999)。幼児期における運動を重視し、主体的に体を動かす遊びを中心とした身体活動を幼児の生活全体の中に確保していくことが大きな課題であるとされている (文部科学省, 2012)。柳田 (2008) は、幼児期の運動遊びの充実が小学校体育への連続性を高めるとし、幼稚園教師を対象に運動遊びに対する指導理念を調査した。その結果、幼稚園教師は幼児の自発的な運動欲求を重視し、必ずしも運動の発育・発達段階を考慮した指導を行っていなかったことから運動遊びに対する指導理念が子どもの体力低下を抑制する一因となっていることを報告している。吉田ら (2012) は、勤務経験が5年以下の幼稚園教員を対象に運動指導の実態と教員の意識を調査し、運動遊びは体力向上だけが目的ではなく、体力向上以外の目的もあると報告している。穂丸ら (2007) は、保育教材として導入されている「伝承遊び」の実施状況と保育者の認識を調査し、伝承遊びを保育活動に導入する理由として子どもの成長や発達に有効であることや日本の遊び文化の継承のためであることを挙げているが、保育者の伝承遊びに対する知識不足も警告している。

今回、男性教師は運動を肯定的に捉え、運動指導に自信を持ち、体育授業によって子どもの体力は向上するとし、女性教師は伝承遊びが文化的な遊びとして捉えていることが示された。このことから指導者の要因が、子どもの運動嫌いや体力低下に何らかの影響を与えているものと推察される。子どもが運動嫌いになる誘因として教師の意欲や熱意を過剰に授業に取り込んだり、無理に激しい運動をさせたり、過度な運動量を強いていることも想像される。教師側の考えによって子どもの運動の意欲を減衰させないように、教師は子どもが運動に何を求めているのか、運動をどう捉えて

いるのかを理解し、体力向上の要因を探りながら子どもの運動指導を実践していくことが重要であると言える。

V. おわりに

我が国は、平均寿命の伸長とともに少子化が進み、急速に「高齢社会」に移行している。社会の様々な分野で技術の高度化や情報化等の進み、これらが国民に恩恵をもたらしている反面、人間関係の希薄化、精神的なストレスの増大や運動不足、新たな職業病の増加など、心身両面にわたり健康上の問題を生み出してきている。学校では子どもの体位は向上しているものの、体力・運動能力については逆に低下する傾向が続いている。健康とは、病気がなく、身体的・精神的に良好な状態であるだけでなく、社会的にも環境的にも良好な状態であることが必要であるとされていることから子どもに対する健康教育は、子どもが発育・発達の著しい時期であることなどから他の年代とは異なり、重要な意義と役割がある。子どもについては、生涯を通じて心身ともに健康で安全な生活を送るための基礎を培うという観点から、学校で組織的・体系的な教育活動を行っていくことが重要であると考えられる。

地域社会においても地域連帯感が希薄化し、地域の教育力の低下が見られ、子どもたちの遊びの形態が変化し、地域において日常生活の中で体を動かす機会や場も減少している。

これらのことから、学校における指導の充実を図り、地域社会の生活を通じて健康に関する基本的な知識の習得や理解及び能力・技術の育成が、総合的・効果的に行われる必要がある。

今回は、学校教育段階で教師が子どもに対する運動意識を把握し、子どもが運動の価値を再認識し、実際の行動に結び付けられるように運動に関する学習を生涯にわたって取り組んでいけるような運動プログラムを考案していくことが体力向上につながっていくのではないかと考え、基礎的な研究を行った。今回得られた資料をもとに、今後は、子ども自身がどのように運動を捉えているのかを明らかにし、今回、取り上げた「伝承遊び」を小学校教育の中で活用していく実践等を検討していくことが課題である。

文献

- 1) 安藤幸, 岡田晶子 (2003) 徳島県における小学校舞踊教育の現状と問題点 - 1991年と2001年の表現運動指導の比較を通して - 鳴門教育大学実技教育研究 13, 53-65.
- 2) 穂丸武臣, 丹羽孝, 勅使千鶴 (2007) 日本におけ

る伝承遊び実施状況と保育者の認識 名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究 7, 57-78.

- 3) 穂丸武臣 (2010) 伝承遊びの実施状況と課題 - 園種・設置形態による比較 - 名古屋経営短期大学紀要 51, 57-70.
- 4) 石川恭, 加藤玲香 (2013) 小学校体育科への伝承遊び導入について - 子どもたちの直面する様々な問題とのかかわりから - 愛知教育大学教育創造開発機構紀要 3, 19-25.
- 5) 岩間英明 (2011) 子どもの体力向上に関する一考察 - 体育主任の意識調査から - 松本大学研究紀要 9, 31-46.
- 6) 加古里子 (2008) 伝承遊び考 3 小峰書店
- 7) 小林寛道 (1999) 現代の子どもの体力 体育の科学 49, 14-19.
- 8) 厚生労働省 (2012) 国民健康・栄養調査
- 9) 熊谷浩明, 池田拓人 (2013) 小学校教師の体育好き・体育嫌い - 子どもを体育嫌いにさせる教師行動との関連性 - 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 23, 47-55.
- 10) 文部科学省 (2012) 幼児期運動指針
- 11) 文部科学省 (2012) 平成24年度全国体力・運動能力, 運動習慣等調査結果 収録した取組事例校一覧とその分類
- 12) 文部科学省 (2013) 平成25年度全国体力・運動能力, 運動習慣等調査結果 取組事例集
- 13) 岡野昇, 山本俊彦 (2003) 現代の子どもの教師の体育に対する意識調査 三重大学教育学部紀要 (教育科学) 54, 33-43.
- 14) 岡野昇, 伊藤暢浩, 山本俊彦, 加納岳拓 (2010) 小学校教師における「体力を高める運動」に関する意識調査 三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 30, 83-88.
- 15) 佐藤志穂, 糸野豊, 丸山富雄 (2000) スポーツ参加における性差の社会学的研究 仙台大学大学院スポーツ科学研究論文集 1, 13-22.
- 16) 寺山由美 (2007) 「表現運動」を指導する際の困難さについて - 千葉県小学校教員の調査から - 千葉大学教育学部研究紀要 55, 179-185.
- 17) 中央教育審議会 (2002) 子どもの体力向上のための総合的な方策について (答申)
- 18) 山下玲香, 石川恭, 都築繁幸 (2014a) 教育環境学の視点から見た子どもの体力低下に関する一考察 - 体力向上の取り組みの実践とその課題を中心に - 教科開発学論集 2, 185-191.
- 19) 山下玲香, 山下純平 (2014b) 子どもの体力向上を目的とした運動系伝承遊びの学校教育への導入 - 学校・家庭・地域をつなぐ - 愛知教育大学保健体育講座紀要 38, 27-30.

- 20) 柳田信也 (2008) 幼稚園教師の運動遊びに関する指導理念の調査研究 国際学院埼玉短期大学研究紀要 29, 21-26.
- 21) 吉田伊津美, 岩崎洋子 (2012) 幼稚園における運動指導の実態と教員の運動指導に対する意識-国公立幼稚園と私立幼稚園との比較- 東京学芸大学紀要総合教育科学系 63 (1), 107-113.
- 22) 吉野尚也 (2002) 小学校体育における「体ほぐしの運動」について-「体ほぐしの運動」に関する教師の意識調査- 東京女子大学紀要 37, 73-83.